

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2022 年

No. 132

2022年3月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2022 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

なぜ「トランスジェンダー男性学」なのか…………… 1
いつきの“ヒューマン・ピーニング”^⑫…………… 7
多様な性のゆくえ^{③⑨}…………… 8

性教育・性科学 世界の今^③…………… 9
今月のブックガイド…………… 10
JASEインフォメーション…………… 11

なぜ「トランスジェンダー男性学」なのか トランスジェンダーと男性学の接点を探る

『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』著者 周司あきら

はじめに

「トランスジェンダーの男性（以下、トランス男性）」とは、誰か。出生時に「女性」として性別を割り当てられたが違和感をもち、「男性」として生活することを望む人を指す。前提として、トランス男性には3つの状況があることを想像していただきたい。

シスジェンダーの男性（以下、シス男性）同様の生活を送っている場合があること、シス男性同様の生活を送りたくても不可能な場合があること、シス男性同様のあり方を望んでいない場合があること、の3つだ。

これまで「男性」といえば、性別違和のないシス男性を前提としており、SOGI（性的指向や性同一性）に多様性がなかったことが指摘できよう。ましてや男性学という、「男性の生き方を探るための研究」^①の範疇では語られてこなかった。男性学はシスジェンダ

ーでヘテロセクシュアル（異性愛者）である男性を対象とした語り口が主流だが、なぜ同じく「男性」であるにもかかわらず、トランス男性は男性学の範疇に含まれてこなかったのか。あるいは、既に男性学内で解釈される「男性」の一人ではあったかもしれないが、なぜ特有の視点は見過ごされてきたのだろう。『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』の中では、一貫してトランス男性を「男性」の範疇に位置付ける。元「女性」や、トランスジェンダーという「性的マイノリティ」という語り口では焦点の当たらなかった実態に迫る。

トランス男性の男性性

ここからは、トランス男性の男性性（Trans Masculinity）に着目したい。もちろんシス男性同様に生活しているトランス男性にとっては、あえて独自性に着目する理由はないと思われるだろう。しかし、少しば

図1 トランス男性を語るとき



かり身体的特徴が異なるシス男性としてではなく、多くの場合がジェンダーの移行を経験しているトランス男性には、独自の男性性が備わっていると指摘できよう(図1)。

まず、シス男性が「変化に対応できない」まま、ジェンダー平等への動きが少しずつ進む世の中で「何か奪われている」という剥奪感に囚われている一方で、トランス男性は身体治療にしろ周囲の環境にしろ「変化しなければ男性として生きていけない」存在だったはずだ。さもないと女性としてミスジェンダリングされ(性別を間違っ取り扱われ)続けるからだ。つまり、否応なく変化への耐性を習得させられてきた。

ジェンダーの移行を経験するため、「同性」や「同性愛」に対する認識もシス男性とは異なる可能性がある。シス男性がホモソーシャルな文化の中で女性蔑視や男性同性愛嫌悪を培うとき、トランス男性はそうではなかった。むしろ、自身が女性差別同然の取り扱いを受けることでフェミニズムに親和的であったり、男性同性愛を忌避するのではなく「男らしさ」の一環として称賛することさえある(トランス男性のなかには、シス男性同然に、あるいはシス男性以上に「男らしさ」を発揮させる者もいるが)。

経験の差異があるゆえ、トランス男性には「男性ではあるが、シス男性とは異なる」⁽²⁾男性性が見出せるだろう。社会的に優位に見なされる「覇権的男性性(hegemonic masculinity)」⁽³⁾を継承することを拒んだり、その前提にある男性間の序列そのものに不快感をもったりする。ここには葛藤が生まれる。トランス男性も男性である以上、シス男性中心社会を維持する共犯者にならざるを得ない場合があるからだ。

トランス男性は既存の男性学で語れるか

トランス男性は男性であるが、すぐに既存の男性学に賛同できない理由がある。

第一に、トランス男性に特有の経験が男性学に含まれてこなかったからだ。少年時代に男性ジェンダーで抑圧されたシス男性とは違い、トランス男性は「男らしく」育つように強制されてこなかった。トランスジェンダーという社会的マイノリティとして現状を生き抜くとき、「稼得役割」を担い苦心するサラリーマン⁽⁴⁾の男性像にもすぐには合致できない。女性同然に、あるいはトランスジェンダーという境遇ゆえ、「生の基盤」⁽⁵⁾を脅かされてきたトランス男性たちが、既存の男性学に「男性」当事者として共感を覚えるのは至難の業である。だがシス男性にしろトランス男性にしろ、社会的に「男性になる」過程があるのは共通だ。

トランス男性はシス男性に遅れることがあるにしろ、男性学で言及されるような男性の「生きづらさ」に迎合していくこともある。シス男性とは異なる立場に立たされてきたからこそ、シス男性中心社会に批判的な視線を備えていることもある。ある意味で「リベラルな男性」として、トランス男性はその他のジェンダーを相対化し得る。従来の男性学が当事者主義に寄るものだとしても、トランスジェンダーの視点を活かして客観的な観察や記述を行えるのであれば、「男性」内部にしながら外部からまなざす実践が可能であろう。ここでいう「トランスジェンダー」とは、トランス男性に限らず、出生時に男性だったが性別違和をもつ、逆の境遇のトランスジェンダーの人々とも共闘可能性があることを示唆する。

男性学に賛同し難い第二の理由は、トランス男性は境遇上、女性差別の被害やトランスジェンダー差別を受けて「抑圧される」側に立たされてきたことだ。社会的に男性化したからといって、同一人物が急に「抑圧する」側として語られがちな男性の立場にすり替わるわけではない。そのため男性が抑圧者としてばかり語られるとき、「男性」に当事者意識をもつトランス男性は立ち位置を見失う。実感させられる「男性としての生きづらさ」は決して女性に原因があるわけではないとすでに知っている。だが、生きづらさはある。

拙著『トランス男性によるトランスジェンダー男性

学』(大月書店)において「男性のつらさ」、すなわち男性の被抑圧性を主軸とした男性学に一定の支持を示したのは、こうした経緯からである。とはいえ、男性一般が伴う抑圧性をトランス男性も担うことがあるので、どの立場で物語るかは難しい。たとえ男性優位の家父長制に賛同しないトランス男性であっても、男性とみなされたことによって、結果的になんらかの利益を得る可能性はある。

第三の理由として、男性学がフェミニズムにどう対応するかという課題を俯瞰して見たとき、素直に「男性」側に参入しづらいからだ。シス男性がジェンダーを思案する際、「生みの親である男社会と育ての親であるフェミニズム」⁽⁶⁾に配慮しつつ語るため、話を進めるのが難しいようだ。というより、男性自身の「生きづらさ」を語るほかは、フェミニズムを男性目線で語るという手法に寄る。後者に関しては、平山亮⁽⁵⁾が試みたように女性フェミニストの二番煎じとは異なった男性視点のやり方で進めていくことが期待されるが、トランス男性自身がその視点をもつには男性として長く社会化されてからでなければ厳しい。

ここで、「男社会が生みの親」ではなかったトランス男性の視点を導入してみれば、杉田俊介が危惧するような「撤退戦」⁽⁷⁾が少しは前に進むのではなかろうか。少なくとも実体験において、性差別のある社会を大前提として通過してきたトランス男性からしたら、フェミニズムを無視することもフェミニズムに対してのリアクションに留まるのもナンセンスだ。すでに性差別の経験者であるトランスジェンダーの人々の視点が「男性」内部で展開させられることに、希望を見出したい。

女性との関係性における男性学批判

(1) 男はつらいよ型男性学への同意

「男性学」を「男性が男性だからこそ抱えてしまう悩みや葛藤を対象とした学問」⁽⁸⁾と定義すると、「男性はつらい」という男性の被抑圧性に目が向く。そのことは女性フェミニストから批判されてもきた。とはいえ男性に表向き優位な社会において、それでも男性に「つらさがある」という話は、実は大いに意味がある。というのも男性以上に抑圧を受けている他の性別の

人々に語らせることはできないため、男性が自ら向き合わねば解消されることのない課題だからだ。

このとき気をつけねばならないのは、「男性はつらい」はあくまでも文意通りの意味である、という点だ。「男性も(女性同様に)つらい」「男性こそ(女性よりも)つらい」という意味では発せられない。したがって、男性の抱える課題は男性で解消していくほかない。

男性が被害者として存在するとき、その批判対象は女性やその他ジェンダーには向くわけではない。法律や、労働の構造や、メディアなどであり、性差別とは異なる軸が見えてくる⁽⁹⁾。しかもそれらを規定してきた、決定権を保持してきた層といえは男性である。性差別から視点をずらしつつも、根本にある性差別から切り離されることはなく、それらは複雑に絡み合っている。男性の被抑圧性に着目することで、より広い視点で話を発展させられるはずだ。

(2) 脱ぎ捨てられない男性特権

男性単体の被抑圧性に着目することで、女性やその他ジェンダーとの関係性を取りこぼしてしまう、という批判はある。女性が主体となってきたフェミニズムは、社会全体を見ていた。社会全体が「男社会」といえるので、フェミニズムは必然的に男性を的に据える機会もあったのだ。しかし「社会」を象徴する男性が男性の課題しか見ないのであれば、社会全体の構造は改善されず、女性蔑視な社会が維持されていってしまうというのは真っ当な指摘だ。

たとえば海妻径子は「研究者自身の男性としての被抑圧経験を重要視する当事者主義」を本質的な特徴とする日本の男性学のあり方は特異的だ、と指摘する⁽¹⁰⁾。澁谷和美は「なぜ男性学者は「男の生きづらさ」を訴えながら「特権(女性支配への志向)」を放棄すればコスト(生きづらさ)もなくなる」と大々的に主張しないのか」と疑問を呈する⁽¹¹⁾。

その理由は、男性内に世代差があるという前提のもとでだが、「放棄するほどの特権がない」男性たちが増えているからだろう。女性に対して「支配のコスト」を負いながら稼ぎ手役割を果たすような男性像は、もはや現実の男性から遠ざかっている。高度経済成長期のサラリーマン像は現代ではリアリティがなく、男性個人でさえ生存のための生活で必死である。

図2

個人の意思とは無関係に、
社会的に権力がある・支配する・
有利な方へ置かれる

男性

プラス地点
(過剰に権利が
付与されている)

ゼロ地点
(あるべき権利が
確保されている)

女性

いないことにされる
副次的な役割しか残されない

マイナス地点
(権利が障害
されている)

また、制度上の優位性に着目しよう。図2のように、人権が確保されている「本来そうあるべき」状態を“ゼロ地点”とする。「人間 (man)」の標準として描かれ、なおかつ他者への支配を容易にする性としては便宜上「男性」を“プラス地点”、抑圧され不当に権利を遮られてきた性としては便宜上「女性」を“マイナス地点”に当てはめることができる。

“ゼロ地点”とは、そもそもそれが標準であるべき地点を指し示しているのであって、それ以上に脱ぎ捨てられるべきものではない。“プラス地点”にいる男性はその過剰な権利を手放すべきだが、“ゼロ地点”にいる男性はそれ以上「脱げる」特権はもっていないことになる。

特権というものは相対的に「脱ぐ」ことが可能であるに過ぎず、絶対的な基準で「脱ぐ」(女性同様に差別される)ことはそもそも求められていないのだ。さもなくば誰も人権がなくなってしまう。全員で性差別を経験しようとするのではなく、性差別のない世界を目指している。そうである以上、たとえ男性が女性より優位に立っていたとしても、男性がそれ以上には下駄を脱げない“ゼロ地点”があるといえる。

男性学やメンズリブによって可能なのは、男性が異常なまでに“プラス地点”にいた過去を反省し、“ゼロ地点”を顧みるくらいのことではない。女性たちが“マイナス地点”から“ゼロ地点”まで向上するには、フェミニズムが活躍してきた。トランス男性の場合は女性や性的マイノリティという扱いのもと、“マイナス地点”で社会的な不利益を被ってきたので、“ゼロ地点”に近づいただけで「男性特権」を実感させら

れる。たとえば発言を遮られなくなったり、痴漢にあいにくくなったりするような、統計に現れにくい事情も特権のうちに含む。トランスではないシス男性の中にも、こうした「脱げる」下駄を持たない・少ない男性がいるのか定かではないが、個々の男性によってどれほど「脱ぐ」実践ができるかは置かれている立場によって異なる。もちろん、「脱げる」ほどの高い下駄を履きながら「脱がない」性差別的な男性は批判されて然るべきであるし、当の男性たちにとっても「男らしさのコスト」を払って「女性支配への志向」を維持するのは楽ではないはずだ。

(3) 「男性」内部のクィア性

全然異なる視点で男女差を見ていく。非ヘテロセクシュアルの立場からいうならば、すでに特権を捨て去った境遇でいかに生き延びるかという実践は、一部の「男性」の中で行われているのではないか。同性愛者や無性愛者たちは、常日頃男女一對の価値観を脱ぎ去るよう、強靱な異性愛強制社会と奮闘している。「妻という女性を獲得し支配する」ような結婚システムは、既にずっと、同性愛者や無性愛者から疑いをもたれ、拒否されている。

異性愛男性に対して提言するならば、クィアな人々を周縁化せず、従属的な位置に置かなければ、そもそも異性愛を絶対視する風潮に縛られる機会は減るはずだ。異性愛強制社会に争う友として、共に選択肢を広げていくことはできるのだ。異性愛男性はなぜか「性的マイノリティ」を自分とは強く線引きして、助けを与えてやらねばならない弱者として、遠目に見ている

ことがある。それによって自身の「男らしさ」を保持しようとしているように見受けられる。しかしクィアな視点は異性愛男性にとっても他人事にはできない構造の問題解決を促すものであり、ときによっては救われるのは異性愛男性の方ではなかろうか。

今後の男性学の可能性

男性の個人的な被抑圧性に注目することと、男性が属性として負う抑圧性を問うことは、問題となる階層が異なるにしろ、一見すると相反して見える問題だ。しかし、どちらかを語るときに、もう一方の課題を棄却しなければならないわけではない。両者をアウフヘーベン（止揚）すれば、優位に立たされている（ように見える）男性が自覚的に自身のつらさを語りながら、それによって、優位に見えていたはずの男性までもおかしいと実感するほど社会全体の構造の見直しが必要なことが明るみに出るだろう。

男性が率先してジェンダーの苦しみを可視化することで、他の性別の苦しみにより焦点が当たることは往々にしてある。男性が優位に構築されている仕組みをあえて有効活用できないだろうか。大東貢生が指摘するように、世間一般の「男性」への政治的アプローチが欠けると、さらに劣位に置かれる女性や性的マイノリティ男性はますます顧みられない⁽¹²⁾。そのことを男性が自覚したうえで、社会全体の改善のために働きかけるという、ノブレス・オブリージュ（財産、権力、社会的地位を持つものは社会的義務が伴う）を施行できるのはマジョリティと見なされる男性ではないか。

男性以上に存在を透明化されてきた女性や性的マイノリティが救われるのは事実、それからのことになる。男性は己が優位であることを活かして、主張する全体の場を正すことができるはずだ。その使命がある。もちろん、それを告げる対象が女性や、規範に当てはまらない性的マイノリティに対する八つ当たりにならない限りにおいてだが。

例えば「男性が働きすぎ」という問題があるとき、それは可視化されている「男性」以外の人々がいかに働くことから阻害されているかという実情を浮かび上がらせるだろう。非正規雇用については男性の非正規雇用者が増加して初めて明るみに出た。それまでも非



トランス男性のフォトエッセイ『COMPLEX』のプロデューサー若林佑真さん

正規雇用の女性は存在しており、非正規雇用ゆえの困難も抱えていたわけだが、無視されてきた⁽¹³⁾。男性が対象になるときに、問題の可視化は早い。男性が自身の被抑圧性にまっとうに向き合い、より周縁化されている他者を抑圧する側に回るのはではなく、社会全体で改善していこうとするならば、男性自身が救われるのみならずその他大勢を底上げする効力がある。ちなみにトランス男性は「性的マイノリティ」の要素をもちながら、性別移行後は「性的マジョリティ」に重ね合わせることが可能な場面もある。

もう一つ、今後の男性学やメンズリブに期待したいことがある。男性であることそのものを受け入れる、楽しむ、謳歌する、という方向性で男性を記述していくことも必要ではないだろうか。トランス男性の経験を踏まえると、「男性として存在しているだけで充分幸福」といえる瞬間がある。トランス男性はシス男性と同一ではいられない部分もあるが、コンプレックスを受け入れて、それでも自信をもって男性としてやっていこうとする姿がある⁽¹⁴⁾。他方シス男性が多く直面する「男らしい」様相には、競争社会の勝者として、あるいは女性を所有・支配する者として価値が付与されているようだ。他者との比較ではなく、あくまで男性の一人である自分単体に魅力を感じていきたい。それによってジェンダー平等にも近づくだろう。

2020年にロンドンで開催された「Masculinities」という展覧会では、年長男性の裸体、若いフットボール選手の意外なほど不安定な姿、男性が射精に至る瞬間の表情を捉えたシリーズなど、あらゆる男性性を写真で映し出した⁽¹⁵⁾。ここで男性側が「見る主体」から「客体化」へ移行するにつけ、女性が被ってきた



トランス男性のフォトエッセイ『COMPLEX』より

ルッキズムとセクシズムをそのまま男性に適應すべきではないという注意点は⁽¹⁶⁾、男性の多様なあり方を肯定的に見出す手法は評価できる。すでにクィアな実践は、身近な「男性」の中で始まっているのかもしれない。「男性」が強固にシスヘテロ的であることから解放されていくとき、必然的にトランスジェンダーの視点も尊重されることだろう。

男性（らしきもの）を構成する諸要素はその時々によって変わりうる。マジョリティ性を問うところから男性学が発展してきたとしても、男性を「シスジェンダーでヘテロセクシュアルの」男性としてだけ記述するのは、そうではない「男性」も現に「男性」として生きている以上、不可解である。「男性」内には女性同然の境遇を経てきたトランス男性もいれば、ノンバイナリーとして自認しながらも男性としての立場に自覚的な人もいる。

男性学はトランスジェンダーと切り離された「男性」のみを対象とするのではなく、すでにトランスジェンダーも含んでいるはずだ。恣意的に見えなくする必要はない。ジェンダーを語る際に「男性」であることは、「有害（有毒）な男性性（toxic masculinity）」として語られるように、積極的に歓迎できる立場とは言いがたく、ときに批判を受ける覚悟が要る。しかし、共に語っていくことはできよう。2021年12月刊行『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』では、トランス男性と男性学の接続点を探った。見取

り図をつくり、詳細を書き込む作業はこれからの楽しみである。

〔注〕

- (1) 伊藤公雄『男性学入門』作品社、1996年
- (2) Morgan M. H. Seament, "Becoming' The Man I Want to Be' Transgender Masculinity, Embodiment, and Sexuality," B.A., Washington State University, 2007/ M.A., University of Colorado, 2010
- (3) Raewyn Connell, "Masculinities" Univ of California Pr, 2005 (Second Edition)
- (4) 多賀太『揺らぐサラリーマン生活 仕事と家庭のはざまで』ミネルヴァ書房、2011
- (5) 平山亮『介護する息子たち：男性性の死角とケアのジェンダー分析』勁草書房、2017
- (6) 蔦森樹編、稲邑恭子『はじめて語るメンズリブ批評』東京書籍、1999、p.125
- (7) 杉田俊介×西井開「男性問題を語りつくそう」2021年12月5日トークイベント
- (8) 田中俊之『男がつらいよ 絶望の時代の希望の男性学』KADOKAWA、2015
- (9) 遠山日出也「最近の男性学に関する論争と私」、2019
- (10) 海妻径子「CSMM（男性〔性〕批判研究）とフェミニズム」『現代思想2019年2月号 特集＝「男性学」の現在—〈男〉というジェンダーのゆくえ』、青土社、2019
- (11) 澁谷和美「ここが信用できない日本の男性学—平山亮『介護する息子たち』の問題提起を受けて」、2019
- (12) 大東貢生「日本における男性運動と男性対象のジェンダー政策の可能性—メンズリブを中心に—」、佛教大学社会学部論集 第69号（2019年9月）
- (13) 栗田隆子『ぼそぼそ声のフェミニズム』作品社、2019
- (14) no.//// (ナンバーフォー)『COMPLEX』よはく舎、2021
- (15) トモコサガ「写真連載「言葉なき対話」Vol.1「男らしさの呪縛から解放する」ロンドンで開催された大規模写真展レポート」、2020
- (16) 北村匡平「男性身体とルッキズム」『現代思想2021年11月号 特集＝ルッキズムを考える』青土社、2021

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ⑫

多様性ワークショップの紹介

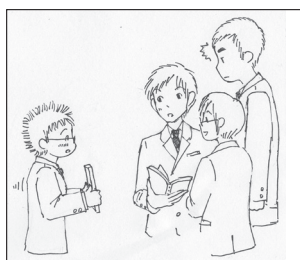
土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

高校の人権学習は、限られた時間の中でさまざまな人権課題を知ってほしいという思いから、総花的な内容になってしまいがちです。一方、人権教育を進めるために、「普遍的な視点」と「各人権課題の視点」のふたつのアプローチからとりくむことが必要であるとも言われています。前号と前々号でとりあげた「世界人権宣言」についての授業は、まさに「普遍的な視点」からのアプローチです。そして、2 学期以降は、どちらかという「各人権課題の視点」が中心となります。

ただ、わたしは「普遍」と「各人権課題」は「あれかこれか」の関係ではないと思っています。例えば、世界人権宣言の授業でも「普遍」を考えるために、ストリートチルドレンやホームレスといった、個別の人権課題をとりあげています。逆に、各人権課題を学ぶことを通して、普遍的な視点が得られるとも考えています。そして、それらをつなぐキーワードが「多様性」であると考えています。そこで、わたしの勤務校の1 年生の人権学習では、4 月の世界人権宣言の授業に続いて、6 月にオリジナル教材である「多様性ワークショップ」をおこないます。

この授業では、下の例のような絵が紙の両面に描かれた 14 枚のカードを使います。



それぞれのカードには絵があるだけで、説明はありません。ちなみに、このカードは「ひとりでいたい／みんなでいたい」です。他に「右利き／左利き」「女の子／男の子」「ネコ好き／イヌ好き」「自分が好き／自分が嫌い」「マニア／マニアじゃない」「靈感がある／靈感がない」「時間を守る／時間が守れない」「空気を讀まない／空気を讀む」「ついしゃべってしまう／寡黙」「メガネ／裸眼」「市内出身／市外出身」「電車通学／徒歩通

学」「聞き役／しゃべり役」といったカードがあります。なお、このカードのイラスト作成にあたっては、中学校で美術の教員をされている友人の青丹ゆきさんに協力していただきました。

生徒にはこれらのカードを 1 セット配布します。また、担任は黒板に貼りつけられるように大きなカードを持っています。配布したら、1 枚ずつカードの説明をしながら、例えばさっきの例で言うなら「わたしは、どちらかという「みんなといたい」やなあ」などと言いながら、自分のカードを黒板に貼ります。同時に、生徒たちにも「どちらかというところら」という面を選んで机の上に置いてもらいます。これを繰り返します。ワークそのものはこれだけです。

14 枚すべてについて繰り返すと、全部で $2^{14}=16,384$ 通りになります。例えば、10 枚だけやったとしても $2^{10}=1,024$ 通りになります。このワークはクラスごとにおこなうので、1,000 通りを越すパターンがあれば、すべて同じになることはほとんどありません。まさに、クラスの中の 40 人ですら多様であることが、カードによって可視化されます。

ただし、このワークの大切さはこのあとにあります。それは、多様さの間に権利の不平等があることを示すことです。例えば、「左利き／右利き」のカードをとりあげ、クラスの中にいる左利きの生徒にインタビューします。すると、駅の自動改札機で不便したり、ハサミを使いにくかった経験を語ってくれます。それを聞いた右利きの生徒は、それまで知らなかった友だちが感じる不便さに驚きます。また、左利きの生徒自身もそれが当たり前だったので、自分が不便していたことに気づきます。そこで、「なぜこのような不平等が起こるのか」ということを問いかけます。そのことを通して、多数者向けの社会が少数者に不便を強いていることが可視化されます。さらに「それを解決するにはどうすればいいか」ということも考えてもらいます。

他のカードの使い方や、その後の展開、また、このワークを思いついた経緯は次号に書くことにします。

多様な性 のゆくえ

One side/No side [59]

荒波を超えて

毎年1月にスイスのダボスで開かれる世界経済フォーラムの年次総会（ダボス会議）が、コロナ流行の影響で延期された。昨年もいったん延期が決定し、結局は中止になった経緯がある。

今年はどうか。オミクロン株の流行で状況は依然、予断を許さない。1月後半にはオンラインの代替イベント『ダボスアジェンダ2022』が開かれている。各国の政府首脳や民間企業、市民社会組織、国際機関の指導者らが『世界の今（State of the World）』をテーマに課題の解決策を議論する会合だ。岸田文雄首相も官邸からバーチャル参加し、演説を行っているので、ご記憶の方も多だろう。

イベント3日目の1月19日には社会改革に功績があった人を表彰する Social Innovators of the Year が発表され、国連合同エイズ計画（UNAIDS）のブラディーブ・カッカティル局長（イノベーション担当）も15人の受賞者に含まれていた。UNAIDS が発表したプレスリリースによると『社会起業家と政府、投資家を結び付け COVID-19 の検査や医薬品の価格など世界が抱える保健問題の解決策をさぐるプラットフォーム Health Innovation Exchange（HIEx）の創設における功績が認められた』という。

袖すり合うも他生の縁というか、カッカティル局長には2018年2月22日に日本記者クラブで記者会見をお願いし、その司会を担当したことがある。実は会見は直前まで UNAIDS のミシェル・シディベ事務局長が行う予定だったが、当日の朝に随員職員から「事務局長は家族の事情で朝早くジュネーブに向かった」と電話連絡が入った。もう日本にはいないという。カッカティル局長はその代役である（欄外アドレス参照）。

どうなることかと心配したが、会見では HIV 治療薬の普及状況や資金事情を中心に、その時点での世界的なエイズ対策の現状を手際よく、しかも分かりやすく説明してもらい、司会としては、事務局長でなくてかえってよかったと思ったほどだ。

ただし、気になることが一つあった。事前打ち合わ

せで、カッカティル局長から「海外メディアの記者は来ないのか」と尋ねられ、「残念ながら来ないと思う」と答えると、少しほっとした表情だった。

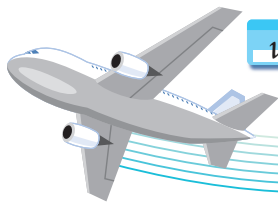
なぜ、ほっとしたのか。翌23日のUNAIDS公式サイトには、3月末に任期満了のある幹部職員が、再任を求めずに退職するというお知らせが掲載されている。調べてみると、英国の新聞には少し前から、この幹部の女性職員に対するセクハラ疑惑が報じられていた。そうか……うかつにも私はその時まで、事務局長のドタキャン帰国の理由に気が付かずにいたのだ。

このスキャンダルは幹部の退職で幕引きとはならず事務局長の進退問題に発展している。組織の在り方を問う独立の委員会が編成され、同年12月に『UNAIDS事務局は危機的状況であり、通常の業務にも支障をきたしている』として、ミシェル・シディベ事務局長の即時退任を求める報告書を理事会に提出した。シディベ氏の『カリスマ的かつ独裁的な』リーダーシップのスタイルが『個人崇拜』と『えこひいき』の傾向を助長し、内向きで『ハラスメントと権力の乱用に甘い』環境を生み出してきたと報告書は指摘している。

シディベ氏は粘りに粘って翌2019年5月まで在任し、その時点で、母国マリの保健相に転身した。

UNAIDS の事務局長にはその後、ほぼ半年の代行期間を経て国際 NGO オクスファム・インターナショナルの事務局長だったウィニー・ビヤニマ氏が就任している。時間がかかったのは、国連が後任の選出プロセスに慎重を期したためで、アントニオ・グテーレス事務総長は、公募を経て最終的に5人に絞られた候補者のうち唯一の女性だったビヤニマ氏を選んでいる。もちろん能力を評価したからこそその選任だが、荒波の中を再出発する UNAIDS のかじ取り役は女性に任せたいとの判断もあったのではないと思う。

カッカティル局長はそうした試練を生き延び、エイズとコロナの二つの流行に挑む新たなイノベーターとして表彰された。会見でまんまと煙に巻かれた記者としても、恩讐を超えて祝福したい。



vol.3

包括的セクシュアリティ教育をめぐって

柳田正芳（やなぎだ まさよし）

性の健康イニシアチブ 立ち上げ人 / 代表、日本性科学会 事務局長、WAS（性の健康世界学会）Youth Initiative 元メンバー。性の健康に関する活動のあちこちに潜伏。

性教育・性科学
世界の今

▶▶ エビデンスギャップと研究の必要性

最近日本でも話題にのぼることの多い「包括的セクシュアリティ教育」に関連した取り組みを取材したいと思い、海外在住の友人・知人に声をかけてみました。ある人が「取り組みというわけではないのだけれど、ユネスコが『包括的セクシュアリティ教育におけるエビデンスギャップと研究の必要性』という興味深い文書を発表していますよ」と教えてくれました。

文書は「包括的セクシュアリティ教育に関する現在の知識ベースを概説して、主要な研究課題とエビデンスギャップを明らかにしたうえで、政策と計画編成のためのより強力でニーズに基づいたエビデンスの活用を支援すること」（筆者仮訳）が目的とされています。

エビデンスギャップとは「ある実践や方法に対して有効性（や有害性）の根拠や証拠がないこと」や「有効性に関する根拠や証拠があるのに取り組みが行われていないこと」などを指す言葉です。

上記の目的に沿って、①包括的セクシュアリティ教育の成果／効果、②カリキュラムの内容、③届け方、④支援の構築、⑤研究の方法／アプローチ、の5分野に関して議論されています。

①については、包括的セクシュアリティ教育が、学校や地域といった個人を超えた範囲において男女平等や暴力に対する態度を変革させたかを調べる必要性が高まっていること、包括的セクシュアリティ教育の非健康的な結果に関する研究は普及していないことなどが挙げられています。そのうえで、今後の研究への提言がまとめられています。

②については、カリキュラムの開発は、発達に適した段階的な方法でセクシュアリティについての議論が含まれている必要があること、若者の視点を採り入れ、周縁化された人々も含む若者の生活に関連したものである必要があることなどが挙げられています。そのうえで、今後の研究への提言がまとめられています。

③については、今後の研究への提言として、例えば包括的セクシュアリティ教育を効果的に行うためにど

のように設計し、実施するかについての学校レベルの研究が必要であることや、教師の心構えに関する研究を通して各分野の根拠とよい実践を検証し導き出しているかどうかということなどが挙げられています。

④については、包括的セクシュアリティ教育に肯定的な関係者だけでなく、まだ納得していない関係者も巻き込んでいくことが重要であると、パキスタンやメキシコ、アメリカ南部などからの教訓で分かっており、抵抗勢力に対処するには、さまざまな利害関係者との継続的な対話にオープンになることが必要であると書かれています。そのうえで、今後の研究への提言として、意思決定者がよりよく反応するようなトピック（「費用対効果」や「健康上の成果」「子どもの保護」など）をはじめ支援を構築する上で何が効果的であるかについてより多くの証拠を得ることや、反対派が包括的セクシュアリティ教育に対して連想する感情や恐怖に基づくメッセージ、誤った情報を押し返すための戦略に関して（ソーシャルメディアの力と広がり considering）定性的調査を行うことなどが挙げられています。

⑤については、研究は包括的セクシュアリティ教育の複雑で多次元的な性質に取り組む必要があると書かれています。

日本でも「包括的セクシュアリティ教育」という言葉が聞かれる機会や、その実践を試みる人や団体、実践のための学びの機会が増えています。「目指すべき性教育の国際スタンダード」として考えられる節もありますが、完璧なものではなくまだまだ改良する余地があるという指摘もされます。よりよくする実践が進められているということが、包括的セクシュアリティ教育をさらによいものにしてくれると思いますし、日本での実践にもよい効果をもたらしてくれるものと思います、『包括的セクシュアリティ教育におけるエビデンスギャップと研究の必要性』について簡単ですが取り上げました。

文書の全文はこちらから読むことができます。

<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000380513>

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

哲学的に理論化の試み

性自認（性同一性）という言葉をよく耳にするようになった。トランスジェンダーについて説明する際に、生まれ落ちた際の身体とは別の性別意識を本人が持つ場合に、「性自認が男（女）だ」などと言い表す。もちろんマイノリティにかぎらず、女性だったら女性の「性自認」を持ち、男性だったら男性の「性自認」を持つものだとも表現される。

しかし、この「性自認」がいったい何であるのか、よくよく考えてみるとわからない。自分自身を内省してみると、私は性別は男であると自覚するし、戸籍など書類上もそうになっているが、それは自分の生物学的、解剖学的性別がその器官などによって客観的に男だと認識している事実すぎない。とりたてて「性自認は男だー！」というような強烈な自意識や生理的な感覚を抱いているというのとは違う。むしろよく言われるような「男らしさ」「男のジェンダー規範」などはかなり違和感を感じながらも、でも身体的な現実からするとやっぱり男だよな？ という程度の実感だと言ったほうがいいだろう。

たぶん、多くの人にとってもそのようなものであると想像するのだが、「性自認」のありようは、トランスジェンダーの当事者にしてもその解釈に幅があったりする。トランスの代表的な論客の一人である三橋順子氏もかつて、自身の「性自認」についてこのように説明している。「私みたいなタイプは根本的に二元性、二元的（略）男の私と女の私と、二元的であることが大きな特徴になっているんです」（伏見憲明編『変態（クィア）入門』）。

三橋氏の当時の自己了解は、トランスセクシュアル（性同一性障害）のような人たちは身体とは反対の性別に自己意識が一元的に固定化されているが、自分の性別意識はむしろ男と女を行き来する二元性である、と。



トランスジェンダーの原理 社会と共に「自分」を生きるために

神名龍子著
ポット出版
定価 1980 円（税込）

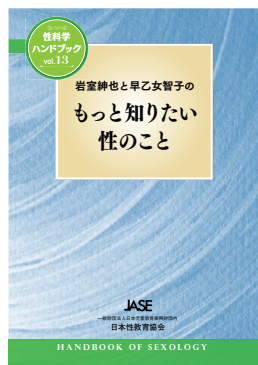
「性自認」とはなんという不可解なものなのか！けれど、それが何であるのか、はたまた「本当に在る」と言っているのか、実のところ議論は深まっていない。脳内に器質的な差異として存在するのではない、という科学的な研究もなされているが、それも確定的な相関性を言い得ていないのが実情だ。つまり、「性自認」が何であるのかわかっていないのである。

さて、今回紹介する神名龍子著『トランスジェンダーの原理』では、「性自認」やトランスジェンダーという性現象について哲学的に理論化しようという試みがなされている。ハイデッガーを援用して欲望論の観点からそれを説明しようというのが、その主眼だ。まず、「欲望とは『思考の底板』」なのであって、それ以上にさかのぼることができない。（略）確かにいえることは、私にそのような欲望が到来し、いまなお持続しているという、その事実だけなのだ」という前提を置く。その上で、

「私個人の経験でいえばまず先に『なぜ自分は女性的な欲望ばかりを持つのだろう』と戸惑う時期があり、その後に『自分の心が女なのだ』と自覚することで自分の欲望の在りようが腑に落ちる。（略）さらには因果関係が逆になって『心が女だから女性的な欲望を持つ』と説明するようになったのではないだろうか」という論理を展開していく。このような議論はこれまででなかったもので、注目に値する。

本書の内容はこれだけではなく、「差別とは何か」「偏見とは何か」など LGBT にまつわるテーマを原理的に掘り下げて思考していく。反差別運動にありがちな「対抗主義的な批判」とは異なり、近代社会の原理のなかから LGBT の生存の可能性を取り出そうとする視点は、これまでのジェンダー / セクシュアリティ論にはない理論的な地平を切り拓いているという意味で、稀有な一冊であることは間違いない。

（作家 伏見憲明）



性科学ハンドブック Vol.13

好評発売中！

岩室紳也と早乙女智子の もっと知りたい性のこと

岩室紳也・早乙女智子著

◆A5判：138頁 頒価700円

『現代性教育研究ジャーナル』2014年4月号～2017年3月号に連載した「もっと知りたい女子の性／もっと知りたい男子の性」に、加筆・訂正して再構成したものです。

主な内容

- part 1 多様な性／「性」を科学する難しさ／女は女として生まれない／性別違和／ジェンダーバイアス・ジェンダーギャップ ほか
part 2 女性の性／膣VAGINAはくぼみである／女子もします！ マスターベーション／人工妊娠中絶と女性の身体権 ほか
part 3 男性の性／「包茎」を科学する／男子はおちんちんで育つ／「男」は環境で育つ性／男性の性機能って何？ ほか

著者プロフィール

岩室 紳也／泌尿器科医。ヘルスプロモーション推進センター（オフィスいわむろ）代表。AIDS 文化フォーラム in 横浜運営委員。

早乙女智子／産婦人科医。公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター研究員、日本性科学会副理事長。セックスセラピスト。

既刊〈性科学ハンドブック〉

☆性科学ハンドブック Vol.11『思春期の性衝動～男の子の性を考える～』A5判・78頁 400円

☆性科学ハンドブック Vol.12『腐女子文化のセクシュアリティ』A5判・96頁 500円

※送料等は、ホームページを参照してください。

◆JASE ホームページ <https://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。

または、Email info_jase@faje.or.jp

TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478



JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】しばらくの間、月～金曜日 11：30～16：30

【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<https://www.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>

すぐ授業に使える

性教育実践資料集 中学校改訂版

〈主な内容〉

- 第1章 中学校における性教育（性教育を実践するにあたって／性教育の目的と意義）
- 第2章 性教育の実践（性教育の現状と実践の課題／学習指導要領における性教育の取り扱い／性教育の指導体制／指導計画の作成／性教育実施上の留意点／家庭・地域との連携／中学校の性教育の今後に向けて）
- 第3章 指導事例（各学年における指導計画と指導の流れ／8つの1年生の指導事例／6つの2年生の指導事例／6つの3年生の指導事例／7つの個別指導事例／5つの組織の指導事例）
- 第4章 参考資料（性行動経験率／性的なことへの関心割合／自慰経験率／性的関心の経験割合の推移／性へのイメージ／性感染症報告数の推移／梅毒患者報告数の推移／HIV・エイズ感染者の動向／人工妊娠中絶実施率及び推移／用語解説）

すぐ授業に使える

性教育 実践資料集

中学校改訂版



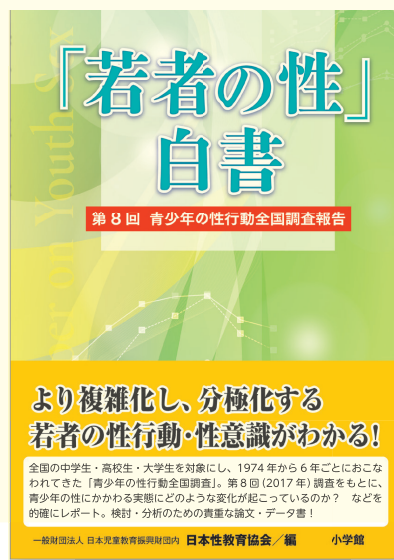
定価 2,200 円（税込） B5 判・224 ページ

「若者の性」白書

第8回 青少年の性行動全国調査報告

〈主な内容〉

- 序章 第8回「青少年の性行動全国調査」の概要
- 第1章 変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化
- 第2章 青少年の性規範・性意識からみる分極化現象
- 第3章 家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか
- 第4章 知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題
- 第5章 青少年の性行動と所属集団の性行動規範
- 第6章 青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性
- 第7章 性的被害と親密性からの／への逃避
- 第8章 青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～



定価 2,420 円（税込） A 5 判・256 ページ

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！